

# 聖書宣教会通信

東京都羽村市羽西 2-9-3 Tel:042(554)1710 Fax:042(554)5562 www.bibleseminary.jp 振替 00150-6-34971

## 巻頭言

### 「舟喜順一先生と聖書信仰と私」

聖書神学舎教師 津村俊夫

「聖書を防衛せよだって？ そりゃあ ライオン相手のほうがらくさ」(C. H. スポルジョン)

聖書信仰のための戦いを終えられて天の御国に凱旋された舟喜順一先生を偲んで、10月18日に、聖書宣教会のチャペルで記念会が持たれました。後藤茂光先生が順一先生の足跡をたどりながら、聖書信仰が日本の戦後の教会に定着するために、あらゆる機会を用いて労されたことを細かく語っていただきました。

上に記したスポルジョンの言葉は、私自身が、留学に際して持って行った J. I. パッカー著『福音的キリスト教と聖書』(1963)に書かれてあった言葉です。大学時代は学生キリスト教青年会の寮で生活し、聖研や読書会でバルトやブルトマンやウェーバーの名前を聞きながら、孤軍奮闘していました。

卒業後、留学の備えをしていた3ヶ月間、聖書神学舎で聴講を許され、一年生のクラスとともに順一先生の上級生のクラスにも出させていただきました。講義の内容は充分には消化できなかったのですが、なにか本質的に重要なことが語られているのだと感じました。

留学当時を振り返って、かつてのルームメイトに、君は入学当初から「聖書の権威」が重要だの、「霊感」が大切だのと言っていたね、と20年振りに会ったときに言われたことがありました。これも順一先生にお会いしたことが大きく影響していると思います。神学校卒業後、ユダヤ教の大学院や、リベラルな神学部で学ぶ中で、私の「聖書信仰」がより確かなものにされたのは、聖書そのものを原文で読んでいく過程に於いてでありました。

帰国後しばらくたった時、福音派は『新聖書注解』のモーセ五書問題に関する論文を巡って大きく揺れていました。エルサレムの学会から帰国したとき、「あなたがその役割です」と言われて、その論文に批判を加えることになりました。その時も、順一先生は「学問と信仰」の関わりについて、その本質的なことについて教え励ましていただきました。信仰と学問の使い

分けではなく、聖書そのものを「主を恐れる者として正面から学ぶ」ことがどういうことであるのかを深く考えさせられました。私が今も「聖書は誤りなき神のことば」と告白する福音主義に立ち、教会の中に留まり続けることが出来ているのには、順一先生の影響が大きいと思います。

大学のポジションを離れて、宣教会の専任になる決心をした時、戦略的な立場を放棄することになると反対の意を表明した同僚もいた中で、順一先生は、じっくりと時間をとって、共に主の御心を求めてくださいました。このことによって学問的貢献が免除されるかのような考えには断固反対され、状況が必ずしもよくはない中で妥協することなく戦いを継続するべきであると励ましてくださったのです。この20年間、予期しなかった重い責任を担うことになった時期もありましたが、論文数が以前と比べて必ずしも減っていないことは驚きです。昨年、世界最大の聖書学会の学術雑誌 JBL の編集委員に選ばれたことも夢想だにしなかったことです。主なる神の不思議な導きであるとしか言いようがありません。

順一先生は、戦後まもなく米国に留学されましたが、当時の日本の教会の必要のため学びの継続を断念して帰国されました。そのようなことが背後にあって、学んだことを主の教会の為に活かし続けるようにと、自ら聖書信仰に生き方として私たちを励ましていただきました。

我が国に「元福音派」の聖書学者が数多くいる中で、「聖書は誤りなき神のことば」と告白し「しっかりとした土台の上に堅く立って」(コロサイ 1:23)「まことしやかな議論」(2:4)と戦う、次世代の牧師・教師達が整えられるようにと祈っていただきたいと思います。



恵みの主と主の教会に支えられて、今年度前期の歩みが終わりました。主をあがめ、皆さまの変わらぬお祈りとお支えに心から感謝を申し上げます。

半年の間にも多くの変化が続きました。とりわけ一年生の多くは、ある種のカルチャーショックを経験するものです。異なる「常識」に出会い、自分の育った文化を直視、検討させられます。他者の持つより良い体系を探して採用するのではなく、みことばに根差して新たな枠組みを構築することを求められます。

教室で、チャペルの礼拝や寮生活で、教会奉仕等を通して、今年もそのような作業が続いています。主のみわざに感謝しています。

研修生会の会長以下三役は、一年間の奉仕を前期末で終えて、選出された次の3人にバトンを渡しました。男子寮、女子寮、家族寮でも、それぞれ寮長、副寮長が交替して、後期が始まっています。家族寮では、9月、10月と出産が続きました。もう一人、今年度中の出産予定があり、ちょっとしたラッシュです。若い家族と小さな子どもたちのためにもお祈りください。

10月18日にもたれた舟喜順一先生記念会については次頁で紹介の通りですが、順一先生から直接の指導を受けたことのない現在の研修生にも、聖書信仰を改めて受けとめる大切なときとなりました。教職員一同も、学舎の維持のためにはではなく、聖書信仰の堅持のために仕えていることを再確認したことでした。

続く19、20日に行われた、秋期調整期間の恒例のリトリートについても報告しておきます。研修生によって企画され、準備がされますが、今年は、交わりのなかに無関心が蔓延しないように、真実に愛し合う交わりに生きるよう

にと願って、分かち合い、祈り合うときを得ました。

後期が始まって1ヶ月ほどの間に、海外宣教に関わる説教者を迎えるチャペルが4回を数えました。目を上げて、世界のために祈りつつ、学びと訓練にあずかる日々です。一年生はヘブル語と出会い、二年生は釈義の奥行きに目を開かれ、三年生はますます学びを深め、三年生、四年生の卒業・修了予定者は、卒論などを含めていよいよ神学校での学びの大詰めに向かいます。来春からの奉仕のためにも具体的な備えが各々に始まっています。

富田雄治先生が後期から教会史の授業担当をしてくださっています。後期は、小林久実先生、伊藤暢人先生、三浦譲先生も授業担当がありますので、教師陣の平均年齢がすこし下がります。主の備えに感謝しています。新日本聖書刊行会の働きに関わっている教師講師も多数です。多忙な教師陣のために主の守りをお祈りください。月例の教師講師研究会は、来夏の夏期研修講座に向けて準備を始めています。聖書にみる「霊」の働きを学んだ今夏の講座に続いて「霊性」に注目して学んでいます。

11月のオープンデイには41名の来会者がありました。この中には、来年度の入会志願を考えている方々もあり、有意義な交わりのときとなりました。福音宣教の働きのために主が召しておられる人々が、主に応答して歩み出せるように祈りましょう。その中から、聖書神学舎にも主の選びの器たちが、主の教会によって遣わされてくるようどうぞお祈りください。

学舎では、11月27日には賛美礼拝をささげ、アドベントへと歩みを進めてまいります。皆さまのアドベントの歩みも祝されますように。全地で、主の御名があがられますように。

## 祈りの課題

- 研修生と教職員、またそれぞれの家族と教会の守りを。学びと訓練が祝されるように。そのためにも、すべての必要が満たされるように。
- 学舎の人事の必要のために。主の時に、主の方法が明らかにされるように。
- 校長と教職員、理事長、理事、監事、評議員のために。異なる責任を良く分担して主に仕える歩みができるように。

## 舟喜順一先生記念会が行われました

10月18日(月)に聖書宣教会で行われた記念会には130余名が集まってくださり、ともに主をあがめるときとなりました。主に感謝し、出席者のお二方のこえと舟喜晃子夫人のご挨拶をもって簡潔にご報告します。「順一先生から教えられたこと」のアンケートにご協力いただいた同窓生各位にも感謝します。また当日の講演を皆さまにもお分かちしたく、特別号としてお届けします。

櫛田節夫 (神戸聖書教会牧師、3期卒)

去る10月18日(月)妻と久しぶりに羽村市の宣教会での記念会に出席した。

冒頭後藤茂光先生は順一先生が生涯心血を注がれた三本の軸を綿密な講演原稿をもとに熱心に語られた。神学校の設立・経営、人材の育成、新改訳聖書の翻訳と裁判に関わる闘い、である。後援に耳を傾けるにつれ、在りし日の順一先生の思慮深く真摯で忍耐深い生き方を思い起こし、在学中何度もしもべとして教会に仕えるように教え諭して下さった先生のご真実を思った。

8期生の今井昭三先生の誠実な証しの姿勢は順一先生の姿と重なって見えた。弟子は実にその師に似るものである。42期生の徳永大先生の証しは、留学すべきか否かの質問に、順一先生の答えは「主のみ声を聞いて決めたらいいのではないですか」であった。最後に晃子夫人が明るいお顔で「順一は皆さんに愛されて幸いな一生を終えることができました」と感謝された。私たち卒業生たちこそどんなに先生に愛され祈られてきたことだろう。胸からこみ上げるものがあつた。

今後、聖書宣教会が主のみ許しのもと順一先生の信仰と祈りと忍耐を受け継いで末永く主の器を育成し神の栄光を現わす神学校とされるよう祈りたい。

田村誠喜 (東村山キリスト教会牧師、20期卒)

舟喜順一先生は、東村山キリスト教会で無牧のたびに三度にわたって計10年ほど、牧会の責任を取って下さいました。

1965年に中学を卒業して間もない私が、教会で初めてお会いした時も、神学舎創立50周年記念礼拝のご挨拶と同様の笑顔でした。数年後、御茶ノ水の路上で倒れられ救急車で運ばれたと伺い、教会の皆で心を合わせて祈った事を覚えています。ちょうど新改訳聖書の翻訳のため労しておられた時です。今回、後藤先生の講演を通し、戦後の福音派の中で、聖書は誤りなき神のことばであるとの告白を巡って、聖書信仰の戦いが厳しいものであつたことを教えられました。時代は変わっても、現在も同様に、「聖書は人々に知恵を与えてキリストに対する信仰による救いを受けさせることができる。それゆえ神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して信じる者を救おうと定められた。神のことばは生きていて力がある・・・」みことばから私たちをそらす様々な戦いがあることを覚えさせられました。順一先生は、聖書信仰の戦いのゆえに、聖書通読運動(聖書同盟)と、牧会伝道者の養成(聖書神学舎)と、聖書翻訳(新改訳聖書)に力を注ぎ続けられたことがわかりました。順一先生を召して下さり御名の栄光のために用いて下さいました主に感謝し、主をほめたたえます。



## 「ごあいさつ」

舟喜晃子

10月18日、主人の記念会を開いていただき、ありがとうございます。先生方、理事の皆さまのご意向によって、個人の単なる記念会ではなく、宣教会の回顧と展望の集まりにさせていただいたことは、大へんすばらしいことと感謝しております。御多忙の中を大ぜいの皆さまがご出席くださり、ありがとうございます。

後藤先生が主題講演として、戦後の福音派の聖書信仰の戦いを、一つ一つの出来事を客観的に正確にたどって、調べ上げてくださったこと、今更のように事実の重みを実感させていただき、ある意味で目が開かれる思いがいたしました。鞭木先生が総括と展望で、羽鳥先生と主人、そして有志の方々によって、ただ主に頼って、本当に地

味に始められたこの学び舎の将来にふさわしい展望を示してくださったことを、心から感謝いたします。

五十数年の間、主の御前に人生の喜びも悲しみも共にしてきました者として、主は、ご自分に抛り頼み、従っていく者に対して、いかに真実なお方であり、あわれみに富むお方であるかを実感させられております。主人が最晩年、アルツハイマーという病の中にあっても、何十回となく書き留めていたみことば、「今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです」を、今あらためて心に刻んでおります。主人を深く愛してくださった皆さま、本当にありがとうございます。

### 図書館だより

図書館長 津村俊夫

「確かな情報」から学ぶことは、聖書研究の場合だけでなく、日常生活においても大切です。

あの人が「こう言っていましたよ」とか、ウィキペディアに「こう書いていますよ」ということを、事実確認もしないで鵜呑みにすると後で大変なことになる場合があります。同じように、あの学者が「こう考えていますよ」と言われて、自分で確認もしないで、文章にしたり、出典を確かめもしないで記憶に頼って執筆すると、後々まで後悔することになります。反対に、読んでもいない資料を、あたかも読んだかのごとく脚注や参考文献に載せることは、虚偽報告になる場合もあります。孫引きの孫引きの孫引きは、インターネットなどを介して簡単に助長され、情報がどんどん膨れあがってどれが確かなものであるのかが分からなくなってしまう時代です。直接、元の資料に当たって確かめることの重要さは、今後ますます増大するでしょう。そういう中、近き将来、死海写本の写本版が誰でもネットで見ることができるようになるのはすばらしいことです。

「確かな情報」を、そうでなければ知る事の出来ない立場にある人々に、責任を持って届ける者でありたいと思います。これは福音宣教においても同じです。図書館が大切な情報を保存し、「確かな情報」を提供できるところであり続けることができるように、お祈りください。

ニュース：Accordance 活用セミナーが開催されます

聖書研究の有力なソフトウェア Accordance の活用のためのセミナーが2011年4月18日(月)に東京都内で開催される予定です。開発者でもある Drs. Roy and Helen Brown が来日なさいますので、有益な機会となることと思います。詳細がわかりましたら、宣教会のウェブサイト等でもお知らせします。

### 編集後記

順一先生の記念会に際しお願いしたアンケートに、卒業の年代を超えた酷似の回答を繰り返し発見しました。

時代に振り回されることなく、一貫してみことばに立たれた教師を再発見し、主をあがめました。(A)

『戦後の福音派と舟喜順一先生』

——聖書信仰の戦いの軌跡——

聖書神学舎元校長 後藤 茂 光

聖書のみことば

コリント人への手紙第一 1 章 18 節、21 節

“十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。”

“事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。”

それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。”

はじめに

ちょうど二年前の聖書神学舎（聖書宣教会）創立 50 周年の記念礼拝の折には、羽鳥明先生と共に舟喜順一先生も出席しておられたのですが、思いがけずその先生が今春、急逝されました。それでこの度、先生を偲ぶ会が催されることになり、聖書神学舎において先生と関わりが深かった者のひとりとして、少しくお話をするようにとご依頼をいただいた次第です。

ここでもう一度、あらためて感謝しつつ確認したいことは、創立者のお一人であり、初代の校長として長年その重荷を負われた舟喜順一先生が、聖書信仰という不動の原点をしっかりと保持し、これを次世代に伝えて下さったということでもあります。私個人としても、聖書神学舎の働きに関わらせていただき、舟喜順一先生のご愛顧とご指導の中で育てていただいたことを心から感謝しております。

そのことを感謝しながら、戦後の福音派と舟喜順一先生の関わりを私なりに考察し、三つの座標軸により、聖書信仰の戦いの軌跡を少しく辿らせていただきたく存じております。

講演の依頼をお受けしてから、まず年表の

作成に取りかかったのですが、何分、時間的な制約があり、体力的にも限界があり、これらのことにつき、一次資料に当たることの出来なかったものが少なからずあり、不十分なものでしかないことを重々承知しております。

また、伝道牧会の第一線から退き、キリスト教界の諸事情にも疎くなり、その最新の事情の情報もほとんど承知してはいません。ですから、出来る限り、関連した出版物に目を通す努力もしましたが、これも不十分であったことを告白しなければなりません。ですからお気づきの点があればぜひお教えいただきたく願っております。

(一) 序論的考察

舟喜順一先生のお父さまの舟喜麟一先生は日本伝道隊（JEB）聖書学校（現在の関西聖書神学校）のご出身（1918 年卒）ですが、そこで英国人宣教師パークレー・バックストーン先生（Barclay F. Buxton, 1860 - 1946）やパゼット・ウイルクス先生（Paget Wilkes, 1871 - 1934）らのご薫陶を受けておられます。

当時の同級生には日本イエス・キリスト教会（現在の日本イエス・キリスト教団）の佐藤邦之助先生、日本同盟基督協会（現在の日本同盟基督教団）の鋤柄熊太郎先生や野畑新兵衛先生がおられたとのこと。麟一先生は 1924 年に日本伝道隊から CJPM（セントラル・ジャパン・パイオニア・ミッション、パーネット宣教師創立）の働きに参加。1927 年福音伝道協会（現在の福音伝道教団）設立の際には理事長に就任されます。1941 年（昭和 16 年）、国策による日本基督教団成立の際には、福音伝道協会は第 10 部に所属。戦後の 1947 年（昭和 22 年）に日本基督教団を離脱し、小林誠一先生らと福音伝道教会を再建なさいま

す。福音伝道教会は1951（昭和26年）年に、福音伝道教団と改称されます。

戦後は福音伝道教団の他にも、戦前からの福音派の教会や教団の日本基督教団からの離脱が相次ぎましたが、外国ミッションとの関係回復もこの離脱を促す一因であったことは否めません。

1953年三月、舟喜麟一先生と前橋キリスト教会は福音伝道教団を離脱されますが、その間の事情を私は承知しておりません。

## （二）第一の座標軸：人材の養成（その一・みことばに仕える献身者の教育）

舟喜順一先生は敗戦の翌年1946年に復員されますが、二年後の1948年には留学のため渡米されます。余談になりますが、敗戦後間もないこの時期、食べることもままならぬ一般の日本人にとっては、高い運賃（船賃）を払って渡航することなど考えられないことでした。

主のご計画とお導きの中でこの渡米留学が実現したのでしょう。

先生は最初ダラス神学校で学ばれますが、フェイス神学校に移り、そこを卒業されます。

両校とも聖書的な福音主義の神学校でした。

そこで「聖書信仰」と「聖書信仰の重要性」をしっかり学べたのだと思います。

そして、1953年1月に帰国し、東京神学塾の教師となりました。当時、島田福安先生と私は一年生でしたが、組織神学を教えてくださいました。東京神学塾の塾長はフェイス神学校出身の長谷川真先生でしたが、私塾的な東京神学塾の経営方針を巡って、舟喜順一先生と考えの相違があったからでしょうか、舟喜順一先生は四、五年で東京神学塾を去っておられます。

1955年3月に東京神学塾を卒業した後藤は、1957年4月からは神学塾の教師となり、教務主任を担当しますが、神学塾は財政的にも行き詰まり、年度末には閉校のやむなきに到ります。

同じ頃、舟喜順一先生は羽鳥明先生、日本クリスチャン・カレッジ（元同盟聖書学院、

後の東京キリスト教短期大学、現在の東京基督教大学）校長のドナルド・ホーク先生と共に聖書神学舎を立ち上げようとしておられ、1958年5月に久我山の家屋を借りての開校に漕ぎ着けられました。その際、東京神学塾の在校生を聖書神学舎の二、三年に編入させていただくことになりましたが、その条件として、後藤ともう一人の教師が聖書神学舎の教師陣に加わることになりました。舟喜順一先生は1958年の開校以来、1983年3月まで25年の長きに亙り校長として、それ以後も教師としてキリストの教会の牧師・伝道者、宣教師の養成にその生涯をささげて下さいました。

また宣教における教会音楽の重要性を認識し、聖書神学舎の教師陣に岳藤豪希先生をお招きになり、教会音楽をもってみことばの宣教の働きに献身する人材の養成に心を砕き、尽力されたことも忘れてはなりません。

つい先月（9月20日）にロスアンジェルス の山田和明先生からメールをいただきましたが、舟喜順一先生が帰国早々、東京神学塾の二年生の時に三年生とともに、「終末論」を教えていただいたとのこと。そして、いつだったか舟喜順一先生がご自分は牧会ではなく、「教える」召命を与えられている、とお語りになったということも記憶しておられてそのことをも知らせて下さいました。

米国留学から帰国されて間もない頃、私が教えていただいた舟喜順一先生の組織神学の講義は、難解であったように記憶しています。

わかり難いと眠りそうになります。眠らないようするため、先生の直ぐ前に席を取るようにはしていましたが、それでも眠ってしまったことがありました。理解力が乏しく、教えるのに手間のかかる私のような者をも、先生は愛と忍耐をもって誠実に教え導いて下さいました。神学の前提と方法について、その基本を教えていただいたように思います。

聖書神学舎の校長となられてからも、このご態度と姿勢は変わることがなかったのではないのでしょうか。このことを証言して下さい卒業生は多数おられることと思います。

舟喜順一先生は、80才を過ぎてなお、「教え

る」召命をいただいている方として、誠実に聖書神学舎で組織神学のクラスを担当して下さいました。

### (三) 第二の座標軸：人材の養成（その二・聖書同盟の働きによる教育）

神学校での教育に尽力なさりながら、晃子夫人とともに時間と労を惜しまずに尽くされたお働きの一つが聖書通読のための月刊「みことばの光」の発行です。そのため1955年に聖書同盟を設立し、長年、主事兼編集者として奉仕してこられました。あまり目立たない極めて地味で骨の折れる編集という仕事を、晃子夫人と共に長年に互って続けられたことに頭が下がる思いです。月刊「みことばの光」の国語表現にも細心の注意を払っておられることにいつも敬服しておりました。一人でも多くのキリスト者が、まず聖書のみことばそのものを自ら読む生き方を身に付けることが出来るようにと祈り願いつつ、聖書のみことばを大切にし、みことばに仕える者として、国語の表現にも細心の注意を払っておられたのです。

聖書同盟関係のお働きについては、今年四月、浜田山キリスト教会での舟喜順一先生の葬儀の際に、現聖書同盟主事の小山田格先生が詳しくお話しになりましたので、これ位にさせていただきたく存じましたが、1982年1月に聖書同盟から「びぶりか」という雑誌が発刊されていたことも忘れてはなりません。

雑誌「びぶりか」には「現代と聖書信仰」という副題が掲げられていますが、米国などにおける聖書信仰をめぐる戦いを知る者として、当時の日本の福音派の状況を憂え、このような雑誌の発行に踏み切られたのでしょう。

「びぶりか」1号の巻頭言「創刊に当たって」には『私どもは、全世界にある、「聖書信仰」をかかげる教会が、そして教会を構成するひとりひとりのキリスト者が、信じ、願い、問題を感じ、行動していることを互いにわかち合うとともに、ほかの人々にも知ってもらう

ために、このような雑誌が必要であることを強く感じてきておりました。』と記されています。

しかし「びぶりか」の発行は長続きしませんでした。1986年12月発行の15号で終わっています。

この「びぶりか」が創刊される4年前の1978年に日本福音同盟から発行された「はばたく日本の福音派」の中の聖書論を問題視して、後藤は当時実行委員長をしていた「リーベンゼラ・キリスト教会連合」から聖書信仰同盟に質問状を提出します。1979年1月から後藤は聖書信仰同盟の実行委員に加えられます。

1982年1月にヨルダン社からジェイムズ・バーの「ファンダメンタリズム」が再版（1977年初版）されますが、訳者のお一人が日本福音同盟の創立会員である日本福音連盟に属する某教団の指導者クラスのお方であることから、福音派の中に少なからざる波紋が広がります。このような中で1982年2月、後藤は聖書信仰同盟の第23回総会において「聖書は誤りなき神の言である」と題して講演を担当し、新正統主義神学者のカール・バルトの「神の言でない聖書のことばが、聖霊によって神の言になる」（→バルト「教会教義学」邦訳Ⅱ／3、103頁以下、147頁）といったような聖書観とは一線を画すべきことを表明します。

ここで、後藤がキリスト信仰に導き入れられた頃の母教会の様子に触れさせていただきたく存じます。戦後まもなく大田区の久ヶ原で宣教を再開された元リーベンゼラ・ミッション宣教師ベルンハルト・ブッス先生と塩屋の聖書学舎（関西聖書神学校の前身）出身の牧師先生が協力して立て上げられた久ヶ原福音教会（現在の日本基督教団南久が原教会）です。

そこでは日本基督教団代々木上原教会の赤岩栄牧師による神学講座が開かれていました。

テキストはカール・バルトの「教義学要綱」（原著1947年、邦訳1951年、新教出版社発行）です。また日本基督教団東京山手教会の平山照次牧師の伝道説教をお聞きする機会もありました。赤岩栄牧師は、聖書が書かれた神の

ことばであることを公然と否定しておられました。

平山照次牧師は涙ながらに十字架のキリストと神の愛をお語り下さったのですが、東京山手教会発行の文書で、キリストの復活は歴史の上での出来事ではないと明言しておられました。

でもお二人ともご自分は福音主義者であると自認しておられたようです。聖書はそのままで誤りを含んだ人間のことばであり、神のことばではないが、御霊の働きにより、神との出会いの中で、それが神のことばになると信じておられたのです。

バルトは神学を教会に取り戻そうとし、教会の学、信仰の学としての「教会教義学」という大著（1932 - 1968、未完）を書き続けられたのでしょうか。そしてバルトはそれを「神の言の神学」と呼んでいたのです。ですから、バルトらの新正統主義神学は、自由主義神学によって崩壊寸前になっていた欧米の教会を立ち直らせた福音主義の神学として、日本においても戦前から高い評価を受けていたのです。最近では、福音派に属する教派・教団の神学校の教師や牧師たちの中に、バルト神学に傾倒してゆく者たちが増えて来ているのではないのでしょうか。

しかし、バルト神学の持つ危うさ、「聖書が書かれた神のみことばである」ことを否定するところから、バルトやバルト神学に立とうとする者たちの予期しなかった、教会の崩壊乃至は弱体化が起こって来ているのではないのでしょうか。

私をキリスト信仰に導き入れてくれた方は、赤岩栄牧師（東京神学社に学び、高倉徳太郎の薫陶を受けた）に傾倒し、私にもその個人誌「指」と共産党の機関誌「赤旗」の購読を勧めてくれました。彼は目白の「日本聖書神学校」を卒業し、大田区内の教会の牧師になりますが、彼は私が牧会していた中野島キリスト教会で礼拝説教をなさったときに、キリストの再臨とはこの歴史の終末に起こる出来事ではなく、キリストとの出会いの中で起こる出来事であると説きました。

彼はやがて、公然とキリストの復活の歴史性を否定し始めます。「リーベンゼラ日本伝道会」（後の「リーベンゼラ・キリスト教会連合」）はやむを得ず彼を除名処分にいたします。

その後、彼は子どもたちに聖書の「神話」を教えるべきでないと考え、日曜学校（当時そう呼んでいた）を閉鎖したりします。何年後にその教会は分裂したようです。もちろん、バルトの聖書観に立ってキリストの福音を語り続けてる牧師たちの少なくないことも承知しています。しかし、「パリサイ人のパン種」ではありませんが、私たちは「バルトのパン種」に、よくよく注意すべきではないでしょうか。

本論に戻りますが、1983年からは聖書信仰同盟の中の「神学専門委員会」において「聖書が誤りのない神のみことばである」とはどういう意味においてであるのか、学びを共にし、4年の歳月をかけて見解をまとめ、それを1987年総会に提出しました。そしてそれを「聖書の権威に関する宣言」として公表しました。

なお、この総会で後藤は聖書信仰同盟の運営委員長に選ばれております。

こうした働きの背後にあってタイムリーに心強いサポートを与えて下さったのは、舟喜順一先生であり、聖書神学舎の教師会の先生方でした。

#### （四）第三の座標軸：新改訳聖書の翻訳と改訂と著作権の保護

戦後の福音派の中での舟喜順一先生のお働きの中で、特筆すべきことがもう一つあります。それは舟喜順一先生の葬儀の中で、津村俊夫先生もお話をして下さいましたが、新改訳聖書の翻訳と版権の保持のための非常なご尽力です。さて、私の書棚には昭和26年（1951年）10月、日本聖書協会発行の「旧新約聖書」（第10版、戦後としては初版本）があります。これがいわゆる「文語訳聖書」（旧約聖書は1887年の明治元訳のまま、新約聖書は1917年の大正改訳）であります。日本の諸教会で戦後



も当初ひろく用いられていた聖書です。

しかし、戦後の若い世代の人たちのためには、わかりやすい口語体で書かれた聖書が必要であるという要望が高まり、日本聖書協会から口語訳聖書が、新約聖書は1954年に、旧新約聖書は1955年に、発行されます。それで福音派の諸教会においても、口語訳聖書を公用の聖書として採用する傾向が広まっていますが、聖書的なキリスト信仰に立つ牧師や教会からは、口語訳に満足出来ず、新しい翻訳聖書を要望する声が起こって来ました。

1959年の日本プロテスタント宣教百年記念聖書信仰運動を契機として、翌1960年2月に発足した日本プロテスタント聖書信仰同盟(JPC)は聖書翻訳特別委員会の設置を決めました。この特別委員会(議長松尾 武先生他14名)の委員の一人として舟喜順一先生が選ばれています。

1961年2月、聖書翻訳特別委員会の代表らが日本聖書協会の総主事都田恒太郎氏らと会談し、口語訳聖書の一部改訂を要請しましたが受け容れられなかったのが、新しい翻訳聖書の刊行を目指すことになりました。

ところが、羽鳥明先生とロックマン財団のロックマン理事長との接触をきっかけにして、1962年、新改訳聖書刊行会が生まれ、新改訳聖書刊行会(委員長・K・マクビティ、松尾 武、舟喜順一、羽鳥 明、堀川 勇、牧瀬雄吉)と米国のロックマン財団との間で契約が締結され、資金調達のメドも立つようになり、同年3月には編集委員会が設置されます。編集委員長は羽鳥 明先生、総主事は堀川 勇先生(日本カペナント教会、現在の日本聖契キリスト教団)、新約翻訳主任は、松尾 武先生(日本基督改革派教会、1909 - 1967)、旧約翻訳主任は名尾耕作先生(日本ルーテル教団、1909 - 1996)、そして舟喜順一先生は編集主事をそれぞれ担当されます。大江 信先生(日本ナザレン教団)もこれに加わっておられました。そして、同年8月から翻訳者(当初29名、後に4名加えられ33名)による原訳の作業が開始されています。

この編集主事の働きが、如何にご苦勞の多

いものであったかは、1962年11月から毎月発行されていた「翻訳と編集」の紙上にその一端を見ることが出来ます。一時期、本業の聖書神学舎の方にはお見えになれなかった日も少なからずあり、校長また教師としての責任を果すのに随分、無理をなさっていたのではないかと思います。このような状況の中で、島田福安先生や舟喜 信先生をはじめ当時の若手の教師たちが心を合わせ協力して聖書神学舎の働きを守って来られたのではないのでしょうか。

1965年の秋に新改訳の新約聖書の翻訳が終了し、同年10月に新約聖書の初版が発行されましたが、それからさらに四年を費やして1969年の10月に旧約聖書の翻訳も終了します。その間の大変なご苦労は、旧約の研究員のお一人として編集主事の舟喜順一先生のお近くにいてお仕事をなさった松本任弘先生がもっともよくご存知のことです。すなわち、旧約聖書の原訳者の訳文の検討などの編集のお仕事と平行して、松尾 武先生亡き後は新約翻訳主任をも兼務し、新約聖書の初版の訳文の再検討のお仕事をも継続されていました。

そして1970年6月に旧新約聖書の初版が発行される際には、新約聖書の改訂版と旧約聖書の初版との合本という形で発行されたのです。

その後も編集主事の仕事は継続されるのですが、ともかく新改訳聖書の第一版の発行にこぎつけ、編集主事の事に一区切りを付けて、聖書神学舎に帰って来られたときには、お顔に憔悴の色が濃く表われ、心身ともかなりお疲れのご様子であったと記憶しています。

ご回復までにはかなりの時間がかかったのではないのでしょうか。

1986年6月下旬、後藤に新改訳聖書刊行会の委員(コミッショナー)になるようにと、文書による要請が委員長のK・マクビティ氏(久保英夫氏代筆)からありました。しかし、それに同封されていた新改訳聖書刊行会の規定は発足当初そのままのもので、委員の任命権がロックマン財団にあるかのような条文が含まれていたため、このような条文を修正し

ていただかない限り、お受け出来ない旨、回答を出しました。翌7月の中旬に規定の改定(案)が届けられ、7月31日から、後藤は新改訳聖書刊行会の委員(コミッショナー)の一人として委員会に出席することになりました。

当時の委員会の構成メンバーは委員長のK.マクビティ氏の他、大江 信先生(日本ナザレン教団)、舟喜順一先生、それに竿代忠一先生(インマヌエル綜合伝道団)と後藤を加えての五人でした(なお羽鳥 明先生は健康上の理由で、その当時は名誉委員)。

しかし、1986年10月、米国で新改訳聖書の著作権をめぐる訴訟がロックマン財団(新理事長ラムベス氏)からTEAM宣教団に対して起こされます(同年10月6日、TEAM宣教団のマクビティ氏はロックマン財団の極東代表の立場を解かれます)。ロックマン財団は新改訳聖書の著作権が自分たちにあると主張しており、TEAM宣教団の日本での働きの一つである「いのちのことば社」に新改訳聖書の出版をさせず、日本の一般の他の出版社にそれをさせることも考えている、との情報も入ってきました。新改訳聖書は思いがけない危機に直面します。そのような事態になることを避けるため、新改訳聖書刊行会は1991年3月、東京地裁に「新改訳聖書の著作権の確認に関する訴状」を提出します。当時、新改訳聖書刊行会は法人格を持っていなかったため、委員六人の連名で訴状を提出しました。これに対してロックマン財団は1993年に反訴状を提出し、新改訳聖書刊行会の6名の委員たちに多額の損害賠償の支払いを要求し、新改訳聖書の販売禁止等の仮処分命令の申立てを行なってきます。

著作権確認裁判の過程で、1993年6月、新改訳聖書刊行会の委員会はマクビティ氏に代えて舟喜順一先生を委員長に選出します。また、新改訳聖書刊行会を緊急に法人化する必要を知らされ、弁護士の助けも借りて、社団法人「新改訳聖書刊行会」の定款(案)の作成をしますが、法人化は当時の法律のもとでは、財政的にも極めて困難でありました。ともあれ、法人化に向けて、まず規則変更をし

て委員会を理事会に改組します。これ以上、詳しく延べる時間的な余裕はありませんし、この後の経緯につきましては「新改訳聖書刊行会」(現、新日本聖書刊行会)の公式サイト(<http://www.seisho.or.jp/>)にまとめられていますので、ここではなるべく簡単に述べることに致しますが、1994年4月、新改訳聖書の著作権裁判の最中に、日本聖書刊行会は福音派の諸教派、諸教会から選ばれた代表によって理事会を再編成し、そこで規約を改定し、新改訳聖書とは別の新聖書の翻訳を決定しました。

ロックマン財団との著作権裁判という外患に加えて、この内憂が舟喜順一先生を悩ませます。日本聖書刊行会のこの決定は、聖書信仰に立った翻訳である新改訳聖書から離反する動きに進む危険を孕んでいることを舟喜順一先生は鋭く察知しておられたのでしょうか。

そして、強靱な意志と粘り腰をもってこの種の動きに全身全霊をもって抵抗されたのでした。

1996年4月に著作権裁判は両者の和解という形で終るのですが、後藤は日本福音キリスト教会連合の全国運営委員会の承認を得て1997年4月から日本聖書刊行会の理事に就任します。そして、日本聖書刊行会が新聖書の翻訳の方向にすすむ動きを憂え、新聖書の翻訳をするよりは新改訳聖書を必要があれば全面的に改訂する方向に進むべきことを理事会で再三提言しましたが、既定路線の変更は全く認められませんでした。後藤は、日本聖書刊行会と新改訳聖書刊行会を一体化させる方向を模索すべきであると考えておりましたが、舟喜順一先生はまだ時期尚早であると考えておられたのでしょうか。歴史の表面には出て来てはいませんが、ここにも熾烈な聖書信仰の戦いのあったことを見落してはなりません。

ところで、懸案の新改訳聖書刊行会の法人化(有限責任中間法人「新改訳聖書刊行会」設立)のお膳立てがほぼ整ったタイミングで、2003年1月31日の理事会で舟喜順一先生は理事長退任を申出られ、津村俊夫先生が新理事長に選ばれます。その年のうちに法人化は実

---

現し、いのちのことば社との「2003年合意書」が締結され、改訂第三版が出版されます。そして、2008年1月1日、新改訳聖書の著作権財産権がようやく新改訳聖書刊行会に返還されます。

ここに到る数年前から、新改訳聖書刊行会は関係諸団体と協議を重ねて来ましたが、2009年1月、摂理的に社団法人「新日本聖書刊行会」が設立され、社団法人「新改訳聖書刊行会」を吸収合併する形になり、新改訳聖書の著作権は法的にも日本の諸教会のものとなり、今後この法人によって新改訳聖書の本格的な改訂がなされる態勢が整った次第です。

これまで、一切の個人的な名誉を求めず、主のご栄光のみが現されることを求めながら、地道に地味に聖書信仰の戦いを戦って来られた先生のお喜びは察するに余りがあると存じます。

## むすび

舟喜順一先生は、あまり表立ったところには出て行かれませんでした。

1960年、聖書信仰同盟発足当時、初代の運営委員長は常葉隆興先生、副委員長には葛田二雄先生とともに羽鳥 明先生が立てられましたが、舟喜順一先生は聖書翻訳特別委員会の委員の一人でした。1968年、日本福音同盟が発足したとき、実行委員長は葛田二雄先生、副委員長は安藤伸市先生とマギービー先生、書記には羽鳥 明先生が立てられました。1974

年、第一回日本伝道会議が京都で行われたときには、実行委員長は安藤伸市先生、羽鳥 明先生は総務局長としてお働きになります。後藤も前述のように1978年頃から1991年頃まで、聖書信仰同盟や日本福音同盟において比較的目立つ場面に立たせられることが多くありましたが、果たしてどれほどの実を残すことが出来たのでしょうか。

議論や論争からは、よき実を後世に残すことはなかなか出来ません。急がば廻れ！という諺がありますが、廻り道のように見えても、地道に、誠実に、時間をかけて人材を育てること、キリストに仕え、キリストの教会に仕え、みことばに仕えるしもべを育てることの大切さを、改めて確認させられております。

終りに、「びぶりか」5号 p.53 に引用されている「聖書の無誤性に関する国際協議会」の目的を読ませていただきます。

「聖書の無誤性の教理が聖書の権威のための本質的な要素であり、神の教会の健全さのための必然的なものであることを明らかにし、擁護し、適用してゆくことにおいて一致した立場をとることと、教会をこの歴史的な理解へともどすことに努めることです。」

舟喜順一先生はその視野を福音派のみでなく日本の教会、世界の教会に向け、聖書信仰に立って祈り考え、行動するお方でした。その聖書信仰の戦いの軌跡を要約することばがここにあると思い、引用した次第です。

ご静聴、有り難うございました。

---

## まとめと展望

聖書宣教会校長 鞭木由行

### 何の展望なのか

本日は、大勢の方々と共に舟喜順一先生の記念会を持つことができましたことを感謝いたします。この記念会において私たちは、順一先生個人ではなくて、むしろ順一先生が求め、そして私たちが受け継いだ聖書信仰を確認する機会となることを願って計画してきま

した。そのため第一部において、後藤茂光先生が戦後における聖書信仰の戦いの軌跡を回顧して、順一先生の歩みを語ってくださいました。そして、私は、今後の展望について何事かを語る役割を担わされております。この役割を与えられてから私は、その展望とは何の展望なのかということをまず考えさせられました。勿論、召された順一先生の展望では

ありません。それならば、聖書宣教会の展望なのだろうか。それもやはりそうではないと思いました。

今から、5年くらい前のことだったと思いますが（正確な年数は思い出せないのですが）、順一先生がまだお元気なときに、順一先生から聖書宣教会について遺言のようなことを聞いておこうという趣旨で、奥多摩福音の家に教師たちが集まったことがありました。そこで話されたほとんどのことは忘れてしまったのですが、一つだけ、私にとって忘れがたい順一先生の言葉があります。それは神学舎を始めるに当たって「それほど、高邁な理念を掲げて出発したわけではなかった」という一言です。同様のことを、私は、聖書神学舎50周年記念の時の、後藤先生の講演からも聞いた記憶があります。「順一先生は『日本の教会がいらないと言ったら、いつでも閉じましよう』と言っていた」というのです。

私は、それを聞いて心が軽くなったことを覚えています。私たちは、この聖書宣教会という超教派の神学校を維持し、継続するために召されているのではないということです。

それは、私たちの第一の願いではありませんし、あってはならないことなのです。日本の福音派の諸教会が聖書宣教会を必要としないのであれば、いつでも閉じる、そのような思いで奉仕しなければならないと思うようになりました。ですから、私には聖書宣教会の展望を語るつもりはないのです。

## 語るべき展望

では何についての展望をなのでしょう。

それは聖書宣教会が建てられた背後にあったひとつの願い「聖書信仰」でありましょう。

松本任弘先生が聖書神学舎について書き留められた一文をつい最近発見いたしました。

その中で、順一先生の言葉として伝えられている次のような文章があります。「聖書を過ちのない神のことばとして一語一語信じる聖書信仰に立つ牧師・伝道者の育成が日本の伝道と教会の成長のために是非とも必要である

との一念で、主に頼り、行くところを知らないで、しかし、(この) 目的を持って出発した。」というのです。

こうして1958年1月に舟喜順一先生、ドナルド・ホーク先生、羽鳥明先生が最初の準備会を持ち、開校されたのが聖書神学舎でした。

このとき、東京神学塾は、在籍していた学生を聖書神学舎にゆだね、塾を閉じました。

しかし、これは三名の先生の個人的祈りから出発したのではないと思います。というのは、神学舎が始まった翌年、1959年は、プロテスタントの宣教が開始されてから丁度百周年にあたりまして、この1959年に「百周年記念聖書信仰運動」が展開されました。つまり聖書信仰がプロテスタント諸派の中で独立的地位を獲得していく時期なのです。そして聖書信仰運動の継続のため、翌年「日本プロテスタント聖書信仰同盟」が結成されました。

それは聖書信仰を推進させるための超教派の団体でした。今日の「日本福音同盟」の核の一つでした。創立者である三名の先生方が、新しい神学校の必要を覚えて祈った背後にはそのような時代背景がありました。

ですから、聖書神学舎は、当初から、この聖書信仰と切り離すことのできない神学校であったのであり、今日、私たちがここで共有すべき展望は、聖書信仰の展望であり、また聖書宣教会がそのことをどのように担って行くかということの展望であろうと思います。

## 聖書信仰を脅かす三つの要因

教会の歴史を振り返るとき、いつも三つの要因が聖書信仰を脅かしてきたと言えるでしょう。一つは、「教会の権威」です。ローマ・カトリック教会は、自らの教会の権威に立脚していました。「教会は、使徒から伝えられた真理を純粹に、忠実に保持している。そして、それはローマ法王の無謬性によって保護されている。だから教会は それ自身で完結している。最終的には聖書の権威に頼る必要はない。

むしろ聖書が教会を必要としているのである。なぜなら、聖書が完成する前から、教会

は存在していたからである。」こうして教会の権威によって聖書の権威は否定されました。

次に聖書信仰を脅かしたのは一連の神秘主義の運動でした。古くはグノーシス主義やモンタヌス主義によっても、また中世にも多くの神秘主義がフランスやドイツで活躍しました。彼らは、黙想や瞑想によって神に到達しようとしたのです。聖書は高いレベルへ到達するための教科書、あるいはその証言である。

しかし、聖書がなくても神に到達することは可能である。こうして人間の「内なる光」の権威によって聖書の権威は否定されました。

この神秘主義が行き詰まったとき、登場してきたのは人間の理性でした。人間の内なる光がみことばを凌駕したあと、聖書の教えは、理性という自然の光の下に置かれ、その結果、超自然的啓示と聖書の権威とは否定されました。さらに破壊的な批評学が発展していきました。

そのことを文字と霊との分離と考えることができるでしょう。聖書と宗教が切り離され、神学と信仰が分離してしまいました。そして、後者は、前者がなくても存在することができると考えられるようになったのです。こうして、信仰の源泉は聖書ではなく、人間の宗教的感情へ移って行きました。ローマ・カトリック教会、神秘主義、合理主義に共通しているのは、いずれにしても聖書は非常に有益であるが、絶対に必要というわけではない、という考えです。それでもローマ・カトリック教会は法王の無謬性という基盤を持っています。

合理主義や神秘主義は、個人の中にその基盤を見いだしています。それに対して宗教改革者たちは、聖書の必要性を強く主張しました。聖書こそは教会が立っている場所である。

このような改革者たちの立場を捨て去るならば、私たちは、別の権威を教会の中に持ち込むようになるのです。

## 聖書信仰の現代的危機

今日の諸教会の中に、私たちは同様の危険の兆しを見て取ることができるように思いま

す。そして、それゆえに聖書の必要性の教理、あるいは権威は後退しているのではないのでしょうか。最初に「教会の権威」はどうでしょうか。それが聖書信仰を圧迫しているような現実がないのでしょうか。これにつけ、私が思い出すのは、数年前「東京キリストの教会」で起きた事件です。幸い牧師は気がついて、クリスチャン新聞に謝罪文を掲載しました。牧師は、教会の中に「弟子訓練と称して上下関係を築いた」罪を告白しています。ここでは、教会という組織が、事実上みことばの権威を凌駕していました。みことばに基づく教会のあるべき姿が追究されていたのではなく、人間的動機が優先され、組織の拡大が優先されていました。あるいは、非常に強い個人主義的傾向のゆえに、カリスマ的牧師のリーダーシップによって教会がみことばに立つことができない現実が生まれているのではないのでしょうか。

次に「聖書から内面的経験へ」という変化も、今日、見逃すことのできない流れではないのでしょうか。みことばよりも、人間の内なるものへと強調点が移っていく傾向がある。カリスマ運動や、聖霊運動、様々な個人的な霊的経験を強調する運動の中に、文字と霊との分離が起きているように思えます。

第三に、理性の位置づけについての戦いも聖書信仰の戦いです。私たちの信仰にとって、理性は大切なしもべですが、決して主人ではありません。しかし、なお理性が真理を決めるような方法論が追究されている現実があります。啓示された真理をどのように理解し、信じるかを考えるために理性は不可欠ですが、理性が主人となっている限りは、神のことばの権威は限定され、聖書信仰は抑圧されるのです。

このような状況の中で、今日、聖書は十分に教会の土台となっているとは言えないのではないのでしょうか。むしろ、聖書信仰の空洞化現象が起きているように思われます。それはなおもスローガンであり、表看板であっても、実質はそこから少しずつ離れている現実が見られます。聖書信仰は静かな危機に直面して

いるのではないのでしょうか。みことばへの強調にもかかわらず、積義に基づく神学が発展しませんでした。そして、それゆえに、いとも容易に福音派諸教会は分裂していったのではないかと思います。あるいは、みことばの強調にもかかわらず、みことばの説教に対する信頼が十分に培われなかった。教会の中で、説教の中心的役割が確立できず、それ以外の方法で教会を建て上げようとする傾向が見られます。みことばだけでは、もはや不十分であると、思い始めているのでしょうか。

## 結論

そこで、私たちはどのような展望を語ることができるのでしょうか。最後に、そのことを少し考えて終わりたいと思います。新しいことは何もありません。第一に、私たちが強調しなければならないこと、そして、実践しなければならないことは、すべての問題について、徹底的にみことばに聞くということです。

それこそが、舟喜順一先生が言い残していたほとんど唯一の遺産であると思っています。

既成の神学的枠組みを拒否し、あるいは偉大な神学者たちが確立した神学的基盤には立たないで、あらゆる問題について、ただみことばから直接聞き取ろうとした。耳を澄まして、じっとみことばに聞き続けることです。

順一先生が残した『救いについて』『教会について』などの書物は、その方向を指し示すものでした。

第二に、私たちが、考えるべきことは「展望」ということばのもつ未来性というニュアンスと矛盾しますが、留まることだと思っています。暫く前に『千年働いてきました』という本を紹介したことがあります。日本には長寿の企業が多くあり、その企業をリサーチしたものです。そこに共通していることは「本業に徹する」原則でした。最初に申し上げたように、聖書宣教会をただ時間的に存続させることは私たちの関心事ではありません。存続させるかどうかは日本の教会が決めることです。私たちにとって大切なことは「本業に

留まる」ことだと思っています。そして、本業から逸脱することへの警戒です。ですから、最初の時と同じように、原語で聖書を学び、そこから聖書のメッセージを語るができるように訓練すること。聖書積義を中心とした教育によって牧師、伝道者を養成し続けること、そこに留まり続けることが課題なのです。すべての制度団体は正反対のものを生み出す傾向があります。それは神学校においてさえ例外ではありません。

最後に、今日の状況の中で、もう一つのことを付け加えることが必要だと思っています。

それは聖書の「敬虔（神を畏れる敬虔）」の回復です。それはいわゆる「聖化」でもなく、歴史的な「敬虔主義」でもなく、聖書の敬虔の追究です。この分野においてもみことばに聞くことが必要とされています。それは外に向かつては世俗化への対抗でもあります。

以上は、一つ一つは、特別のことでもなく、改めて展望と呼べるほどのものでもないと思います。しかし、今日の状況の中で、そして聖書宣教会が建てられた歴史的な文脈を見ると、私たちが心に留めて確認しておく意義のあることだと思っています。

最後に申命記 32章 47節のみことばを覚えて、このまとめと展望を終えたいと思います。

「これは、あなたがたにとって、むなしいことばではなく、あなたがたのいのちであるからだ。このことばにより、あなたがたは、ヨルダンを渡って、所有しようとしている地で、長く生きることができる。」これは聖書と私たちの関係をどう考えるかという問題です。聖書がなくても、それに代わりうるものがあると考えた人々によって、聖書の必要性は脅かされてきました。しかし、今日、もう一度このことを覚えたいと思います。聖書に代わりうるものは何もない、決してない、ということです。それゆえ、ここに立つとき、私たちはもう一度聖書信仰を追究していくようになります。それを今後の展望にしたいと願っています。